

「エッセイで黄金町を語る」作品集

町を見る目

(黄金町芸術学校 2013 前期 小説コース)

目次

西川オルガンの痕跡	桃山桜	1
愛と幻想のエル・ドラド	風小路 純	5
花や色で呼ばれた街の記憶と体験を散策する	HANNA・Y	9
リバーサイド	村上 剛士	13
造園家の視角、歌の証人	ヤブー・ドック	17
大岡川の花火	夜のシマネコ	21
夏の日の約束	小林 朔実	25
梅雨が来た	コガネムシ	29
あとがき		
濃密なエッセイたち	阿川大樹 (講師)	33

西川オルガンの音色を聴きたくなかった。西川オルガンは西川楽器という会社が作ったオルガンだ。西川楽器は日本で最初に国産オルガンの製造を行った会社だといわれている。横浜が主張する「日本で最初の」とか「横浜発祥」というフレーズは正直胡散臭い気がするが、この時は忘れていた。

オルガンの音色が聴けるといふ喫茶店に行ってみた。オルガンは、入口付近にひっそりと置かれていた。装飾は少なく色合いも落ち着いていた感じで新品のように綺麗だった。上にはオルガンにゆかりの人物や建物の写真が飾られ、譜面台には楽譜と一緒に「詳しく知りたい方は申し出てください」というメッセージが置かれていた。

お店のご主人が「ふるさと」を演奏してくれた。リードオルガンの音の良し悪しはわからないが力強い音だった。旭区の方が古い家を壊す時に地下室で発見されたものを譲ってもらい、修理して演奏できる状態にしたという。出会いは奇跡のようなもので、西川寅吉がこの場所にオルガンを呼んでくれたのかもしれないとご主人は言った。

そして、オルガンの上に飾られていた西川寅吉の写真を見ながら、「いい男でしょう。」と言ったのだ。でも、いわゆるいい男には見えなくて「はあ」と答えるしかなかった。

西川寅吉は西川楽器の創業者だ。千葉県木更津市出身の三味線職人で、二十代後半で横浜にやってきた。外国人の技術者について働きながら、オルガンの調律や製造の技術を習得した。明治十五年にオルガン製造を決心して三味線製造をやめた。輸入した外国オルガンがあまりにも高く、貧しい日本から貴重なお金が外国に出てしまうことを嘆いてオルガン製造を思い立ったそうだ。そして、明治十七年ごろに国産のリードオルガンの試作に成功

した。その後、クオリティにこだわり続け、会社は質の高いものを好む教会関係者に人気のあるブランドに育っていった。しかし、明治二十三年の第三回内国勸業博覧会ではライバルのヤマハに負けて三等賞となってしまう。このころ、オルガン製造は一大産業に成長し、価格競争にも晒され、西川は苦しんでいた。とはいえ、西川のノウハウは大正時代までは日本で一番だったのではないかと言われている。

寅吉やオルガンの物語の余韻に浸ったまま、日ノ出町の駅前オルガン広場に行った。工場の跡地というわけではなく、駅前広場のことらしい。かわいらしいモニュメントが建っていた。しかし、モニュメントには自転車チェーンでくくりつけられていた。もの悲しい気持ちになり、次に工場跡地といわれる場所に向かった。

西川楽器という会社は今存在しない。西川寅吉は、後継者に恵まれなかった。優秀な技師であった親戚の松本新吉に去られ、東京音楽学校を卒業してまもない実の娘を病気で亡くし、アメリカに留学させた息子にも先立たれた。それでも守ってきた会社は、寅吉の死後、残った息子の嫁によって、ライバルであったヤマハに売却されてしまった。彼女はこの時、莫大な資産を手に入れ、再婚したという。ヤマハに売却された後の西川楽器は、ヤマハ横浜工場となった。西川ブランドは人気があったため、しばらくは残された。現存している西川オルガンの多くはヤマハ時代のものである。技術力を維持し、浜松工場と競いあった。優秀な技術者が本社の重要な仕事に呼ばれたりもした。が、関東大震災で焼失。この時はなんとか再建したものの、何度か移転を重ねた後、ヤマハの満州進出を機に工場は閉鎖された。

大岡川沿いの工場跡地は静かで人の気配が感じられなかった。何の痕跡もなく、ビルが建っているだけだった。

ふと、ここには「愛」があったんだろうか、なんて感傷的なことを考えた。

2階の小さな四角い窓からは、緑色の桜並木と、空を映して青く輝く水面が見えた。こゝは、大岡川の前に建つ「アート・スペース」の一つ。間口の狭い3階建てのアパートのような建物は、1階のドアを開けると作り付けのカウンターの跡があり、狭くて急な階段が上に続いている。螺旋階段のようにぐるぐる回りながら登っていくと、2階には2畳ほどの板張りの小部屋。天井が低いせいか、圧迫感がじわじわと押し寄せてくる。ただ、そこには、ぼつんと四角い窓があり、そこから6月の明るい真昼の光景が開けているのほっとする。3階も同じような間取り。

こんな、細切れの空間を持つ建物が、大岡川から京浜急行の高架の辺りまで、ぎっしりと埋め尽くしている。ここは数年前までの違法売春街、黄金町。いわゆる「ちゃんの間」の今の姿だ。当時は店先に2、3人ずつの女がずらっと立ち並び、男たちに秋波を送っていた。視線が合って合意が行われれば、あとは1階で金を払い、マットレスが敷かれた上の小部屋でやることをやるだけ。そう、今でも入り口のドアの上には、女達がその下で客を誘っていた、庇の取り外された跡が、まるでアンコール遺跡に残された戦禍の弾痕のように残っている。

最盛時、ここには、約250軒が営業しており、それぞれが2部屋で、一日2回転したとすると、250件×2部屋×2回＝1000回。蜂の巣のような建物が埋め尽くす、この狭い地域で、毎日1000回もの男女の営みが行われ、その中に一つも「愛」がなかつ

たなんて言い切れるだろうか。確かに30分やそこらでは、まともな話をする時間もなく、着ている服を脱いで、文字通り、やることをやるだけ。そこには「愛」どころか、何らかの「コミュニケーション」すらなかったかもしれない。ただ早く終ってほしい女と、それ以上のことを期待している男。或いは、ただ早く出したいだけの男と、少しでも好みの男に抱かれない女……どちらも、ステレオ・タイプな幻想か。

しかし、そこは人間。やはり、何の感情も湧かないってことはないだろう。以前、バンコクで、現地駐在の友人とタニヤ通りの「ゴーゴーバー」に行ったことがあった。暗い店内では、腰に番号札をつけたビキニ姿の小柄な女の子たちがバーカウンターのうえで大勢踊っている。ここでは、どうせ一晩一緒に過ごすのならと、彼女たちからの積極的なアプローチが行われていた。一番人気は「若くて、清潔そうな、背の高い日本人」で、自分は、片言の日本語で話しかけられ、首に腕を廻されてキスをされ、シャツの中に手を入れられて乳首を弄ばれたり、なかなかの歓待を受けた。

その中でひとり、惹かれる女の子がいた。彼女は僕が前日にアンコール・ワットで見た、レリーフの女神像にそっくりで、均整の取れた小さな体に、お椀型の形の良い胸をしていた。微笑を湛えた小さな丸顔は、笑うと人懐っこいけど、アプローチは控えめで、腕に触ってくるくらい。その控えめさは逆に魅力的だった。聞くと、カンボジア国境近くの村の出身だって。もしかしたら、あの女神の一族かも。そんな幻想に心を掴まれ、僕は気が付くと、その「女神」の手を引いて店を出ていた。30分後には、ベッドの上での彼女のサービス過多ぶりに、それがまったくの僕の幻想に過ぎなかったと思ひ知らされることになるのだが。

話をもとに戻そう。確かに黄金町は綺麗になった。ただ、この街は綺麗に「浄化」されたとしても、人間の欲望まで消え去ってしまうことは無い。夜暗くなってから、黄金橋を渡り末吉町を通って帰ると、派手なオレンジ色のミニドレスから見事な生脚を露出したアジア人の女が、駐車場の暗闇から現れて、僕に微笑みかける。その、なんともチャーミングな、えくぼ。

ほら、もしかしたら、ここにも「愛」があるのかも知れない。

川崎堀之内の近くに住んでいます。赤線と呼ばれたその場所を日々歩いていると、呼び込みの黒いスーツの店員さんが道に水をまいていたり、郵便局に子供連れの母親が忙しそうに入っていたり、ロック座の入り口には甲羅が星柄の大きな亀がいて、店員のお兄ちゃん達が横の駐車場で談笑しながら、お客が踊り子さんに投げる紙テープを巻きなおしていたり、地域の自治会館の入り口では、地元の人が向かいの家の人と挨拶を交わしています。

そんな、日常の風景を日々目にしながら生活をしていitせいか、他の花街と呼ばれる場所に行く機会が何度もありました。

東京・千東の新吉原。行った日はイベントが開催されていて、自治会館に行くとき7〜8人の地元のおばあさん達にぎやかに雑談をしていて、山ほどの切ったリングをたくさん勧められました。街を歩くと古い家屋が残っていて、浅草花街の雰囲気を感じられます。吉原弁財天に行くと、関東大震災の遊女慰霊塔が弁天様でかたどられ、女性の悲喜こもごもの歴史を象徴しているように見えます。帰り際には道の両端で柳が風になびき、これが見返り柳というやつかなと思いつつながら、見返るのは男性だけでも、この柳はその男性を呼びとめようとしているようだなとも思いました。

大阪・飛田新地。遊郭料亭として使われていた建物を今は居酒屋として開放している場所に行きました。内装の豪華絢爛な感じや、おやじ好みの大正〜昭和ロマン風のソファがあちこちに置かれ、料亭としておじ様達の社交の場でもあったのかなとも思いました。

町並みは、通りの両端にせまい間隔で街灯が通りを照らし、雑多だったり暗がりの通りではなく、格式めいて風情を感じさせるような街並みでした。

横浜・黄金町。名画座を探して行ってみると、アートイベントなどをやっている場所がありました。何度か足を運び散策してみたりイベントに参加して町を幾人かで歩いていると、通りがかりの地元のおじさんやおばさんが、なんだなんだと立ち止まっただけのぞいてみたり、声をかけてくれたり、まるで大阪や下町みたいでした。アースペースとして作られた建物は高架下にすっぽりと収まっていて、壁はトタン板のような波状の金板でデザインされ、大きな窓が中央にはめ込まれ中の様子がよく見えるようになっていました。その建物の同じ並びには立ち入り禁止にするために打ち立てられたトタン板の壁が続き、面白い対比になっていました。

これらの街は、人の集まりやすい街道や港、繁華街のすぐ近くにあります。人の流れのあるところには、交流が、そして欲望や金銭が集まります。またこれらの街の歴史を見たり聞いたりしてみると、その時代時代の政府、GHQ、警察などの様々な力に翻弄されています。そして、手を入れられたそのあとに残った街を営み続けるのはその街に生活する人々で、その生活はその街を歩くことで感じられました。

その場所ごとに感じた印象はその街の歴史の名残であり、その場所ごとに積み重なった生活の文化で、その場所場所に特色のある味わい深い風情を感じる事が出来ました。

またこれから幾年かが経ち、トタン板壁の建物の周囲の風景が変化すると、その建物をどんなかたちでみる事ができるのか、文章だけでなくオンタイムで実際に感じる事ができ

るのは、街のこれからの歴史をリアルタイムで感じる事ができる面白い体験になるでしょう。

リバーサイド

村上 剛士

(1) 2012年 チャールズリバー

夏のチャールズリバーは緑が生い茂り、光が眩しい。木漏れ陽や水面の乱反射する煌めき、足下にうづくまる真黒な影、姿形を変えながらいたるところに光は存在していた。

うねるように流れる群青色の川面をエイトのレガッタが切り裂いていく。川下からの風がコックスの娘のブロンドを揺らす。彼女は鮮やかな赤のキャップを片手で押さえた。

リバーサイドを幾人ものジョガーやサイクリストが通り過ぎていく。Phoneを腕につけて速く走る男の黒い肌。お喋りしながら走るカップルの褐色のそばかすと笑い声。チャイニーズの若い男たちが鍛えた腕を振り回し大声で話しながらロードレーサーですり抜けしていく。チェックのジャケットに臙脂色の蝶ネクタイを着けた白人の老人が静かに佇み、目を細めて川を見つめていた。

それから帰国して娘を出産し育児に追われて半年たった頃のことだ。その街に無差別爆弾テロがおきたことをインターネットのニュースで知った。

(2) 1996年 鍋割川

尾根は霧に包まれていた。木立の中から一角獣が現れる幻想が頭の中をよぎった。疲れか渴きか、頭が痺れている。次の急斜面を登れば尊仏山荘が見えるはずだ。両手で濡れて滑る岩にとりつく。

そのとき、一筋の閃光が空を切り裂いた。落雷だ。山を低い轟音が揺らす。山が怒っているかのように雨が激しくなり、雨滴が容赦なく体を叩く。私は岩にしがみついた。もう

すぐ、山頂だ、一気に突っ切っていくしかない。じっと待つ。激しい雨滴がじんわりとレインウェアに染み込んでくる。目を閉じ、深呼吸をして、昨夜の自分の部屋の暖かいベッドのことを想った。

やがて、雨が弱くなった隙に、急斜面を一気によじ登った。山頂の小屋はゆっくり流れる霧に包まれていた。小屋に入り、ストーブに水を注ぎ、沸かす。やがて、ストーブの蓋がカタカタと揺れだし、火を消し、コーヒーフィルターに少しづつ湯を注いだ。暖かいコーヒーを飲む頃には、ゆっくりと霧が動いて、山頂は明るさを取り戻してきた。雷雨は去っていった。

山荘を出ると、最後の霧が下の谷間から去っていくところだった。丹沢の緑は深く、優しく穏やかに呼吸しだした。いまや、太陽に暖められて立ちのぼる水蒸気の匂いだけが、雷雨の痕跡だ。すぐ下の溪流に日の光が乱反射してキラキラと光が流れているようだ。二頭の鹿が跳ねて溪流の傍に出てきた。

どこかで熊除けの鈴が鳴った。振りかえると二人の人間が登ってくる場所だった。

(3)1981年 大岡川

小さな曇りガラスの窓を少しだけ開けて、黒い大岡川の水面に乱反射するネオンを眺めていた。波紋が広がった。小さな魚が跳ねて身をよじるように白い腹を見せ、また黒い川へ落ちていく。波紋はゴミや花びらや水面に浮かぶ全てのものを揺らしながら広がっていった。

魚は、夏の夜の羽虫を追っていたのか、暗い水の中で何かに追われていたのか、黒い世界から逃げ出そうとしたのか。小さな魚の運命を思っていると、肩をつつかれた。振りかえると若いアジアの女がウインクしながら親指をたてて襖の方を指さしていた。くると背を向けた女についていき、透きとおった小惑星のような部屋を出た。

さしむ狭い板張りの螺旋階段を一段一段下りると、老いた女が丸い椅子に腰かけ、つまらなそうに煙草をふかしていた。澱んだ煙と甘い匂いを吸い込みながら、安っぽいビニールシートを真ん中で切り裂いただけのカーテンをくぐって外に出た。川は猥雑な空気に満ちていた。

そして、僕はまた蒸し暑い路上に戻った。

「近代文化は造園文化だといっているだろうか。理想的生活と人間をめぐる状況の完璧なアレンジこそ、その自己定義である。」

社会学者のジグムント・バウマンは、近代におけるホロコーストのインパクトを探求する中でこのように述べた。近代は、西洋庭園を造り上げるかのような合理的な手続きと秩序のもとで、観葉植物と雑草とを分類する。造園という目的に沿う存在と、不要な存在とを分かち、後者を排除するのである。

さて、横浜・黄金町は、戦前は問屋街として栄え、戦後は関東随一の青線街として発展してきた近代都市である。そして現在、風俗店に対する「浄化作戦」が行われ、美しいアート・タウンへと変貌した都市でもある。

この浄化作戦は、黄金町において遂行された造園術としてみなすことができる。性風俗店を、「不法滞在」の外国人を、HIV/AIDSを、雑草とみなして駆除すること。浄化作戦開始時の「撲滅宣言」には、造園家の視角が端的に表れている。「私たちが愛するこの街は、風俗店で働く女性が昼夜を問わず刺激的な衣装で店の前に立ち、地域の風紀が乱れている。近隣小学校の通学路上にも店舗が乱立し、未来ある子供たちへの悪影響が懸念される。」

造園家にとって、子どもが守るべき観賞植物であるならば、その成長を阻害する雑草は摘み取らねばならない。それは、近代文化における当然の帰結である。つまり黄金町の浄化作戦は、近代都市にとっては「ふつつ」^③なこととしてある。

だが、「ふつつ」とは何だろうか。バウマンは、ホロコーストではユダヤ人の置かれた

歴史的文脈が欠かせない役割を果たしたと指摘する。ユダヤ人は西洋史のなかで常に、「我々」に対する「彼ら」、「普通」に対する「逸脱」、「正統」に対する「異端」として位置づけられてきた。言い換えれば、ユダヤ人を排除することで、近代文化は自らの根柢を獲得してきた。

「ふつう」も同様だ。正常と逸脱の境界は、あくまで歴史的文脈のなかで形成されてきた。そして重要なことに、この歴史性とは決して中立的なものではなく、差別や排除に繋がる不均衡な力学を内在させている。「ふつう」を成り立たせる裏で、誰か・何かが不当にレッテルを貼られ排除されている。造園家がユダヤ人をそうしたように。

いま黄金町を席卷しているのは、造園家の、「ふつう」の視角から語る声である。風俗店が消えたことを喜び、アートに期待をかける声である。浄化後の今、造園家が排除した声を直接聞くことは難しい。だが、「ふつう」ならざる視角から、黄金町を語る声は必ずあるはずだ。

ところで、やはりホロコーストを扱った思想書にシヨシヤナ・フェルマン『声の回帰』がある。そこで論じられるのは、歌の可能性である。ホロコーストから生き延びたユダヤ人の歌は、言語化可能性を超えたその出来事をも再演し証言しうるのだという。歌は、排除された者による抵抗と記録の技芸である。

歌といえば、黄金町にはTAKUMA THE GREATというラッパーがいる。台湾にルーツを持ち、幼い頃から黄金町に暮らす彼は、「Sumeba Miyako」という曲を歌っている。そこで歌われる黄金町のイメージは、造園家の視角からは見えてこない。「住めば都

の、なごまで悪か無いつて黄金町 now I, m on my way home / just take some time and just stop complain / here's a little story and must be told...」。造園家が浄化しようとした、雑草の生い茂る町の記憶を、この歌は肯定し証言しているのである。

フェルマンによれば、証言を聞くということは、私たち自身が証人になるということでもある。では私たちは、黄金町において造園家の視角を選ぶのか、それとも歌の証人となるのだろうか。

「黄金町の浄化作戦は「ふつうのまち」になることを目指して行われた。「住民」が「ふつう」を求めているということが、作戦を肯定するうえで強力なレトリックとなったのである。」

大岡川の花火

夜のシマネコ

最近、新しい友人ができた。

傷だらけのモリスのギターで歌う、ミュージシャン大藪さんだ。寿町に住みながら、「おたすけ演芸団」という路上生活者支援のユニットを結成し活動している。気が向くと伊勢佐木町、石川町、時には老人ホームへ出かけて行つては味のある歌声を披露している。

大藪さんにはたくさんの友人がいる。大学の教授、カメラマン、会社員、学生など様々だ。中でも有名なのは寿町に住んでいる通称「帽子おじさん」。帽子おじさんは、三年前パリで開かれた「アール・ブリュット・ジャポネ」の展覧会で作品を発表しているアーティストだ。彼は、金魚が泳ぐ金魚鉢やマネキンの頭、ぬいぐるみなどを見事に飾った帽子を頭に乗せて、自転車で颯爽と商店街を駆け抜けて行く。おじさんそのものが走る芸術作品なのだ。ある時、食べ終わったカップ麺の空箱を一個頭に乘せたところ、思いのほかしつくりと納まり、二個三個と乗っけていくうちにヨーロッパで絶賛された芸術的な帽子に辿り着いたのだそうだ。

大藪さんは毎週火曜日、寿町のカドベヤという地域の人たちの憩いの場に顔を出している。「歌声広場開催します。よろしかったらどうぞ、食事もただで食べられます。」とお誘いをうけたので訪ねてみると、気持ち良さそうに足湯を楽しんでいた。「ようこそ。みなさん、この人ばくのお友達。よろしくね。さあ、あんたも靴下脱いで足湯へ入りなさい。」と案内され、いきなり靴下を脱ぐ羽目になった。

足が温まったところで歌声広場のはじまりだ。歌壇広場、懐かしい響きだ。ギターに合わせて「ふるさと」や「花」などの小学校唱歌をみんなで大合唱し、時間を忘れて楽しい

ひとときを過ごした。机に置かれた箱に「夕食ワンコイン制」と書いてあったので、五百円玉を一枚入れ、野菜たっぷりのクリームシチューをご馳走になった。

大藪さんが、伊勢佐木町で歌うようになったのは六年前。教会の前でポーツと立っていると、牧師さんに讃美歌の伴奏をやってみないかと誘われてギターを弾くようになった。しかし讃美歌ばかりではもの足りなくなり、伊勢佐木町で好きな懐メロを歌っていると、偶然通りかかった一人のご婦人が涙を流して喜び、一万円を置いて帰った事に味をしめたのがきっかけだそう。

帰り際「みなさん、願い事を書いてね。寿公園に飾ります。」と短冊を渡された。すっかり忘れていたがもうすぐ七夕だったのだ。年中行事をとて大切に行っている。」

数日後、「労働福祉会館前でフランス映画『ロシユフォールの恋人たち』上映します。よろしかった是非どうぞ。」とメールをくれた。「カトリーヌなんかかっていう女優の映画はよくわかんねえな。」とつまらなかつたようだが、大藪さんは寿町でとても文化的な生活を送っている。

近所の接骨院のお兄さんから、黄金町の大田橋から見るとみらいの花火が穴場スポットだと聞いて、大藪さんを誘う事にした。約束の六時ちょうど、一人の女性を連れてやって来た。その人は髪が腰に届くくらい長く、とても整った顔立ちをしている。しなやかな身体に登り龍の柄のTシャツがよく似合っていた。彼女というわけではなさそう。まだ時間が早かったので、近所の露店で腹ごしらえを終えると、すでに橋のまわりは大勢の人で賑わっていた。三人で橋の欄干に肘をつきながらビルの間を眺めていると、「ドーン」

と大きな音とともにどよめきが湧いた。なまぬるい風がかすかに潮の香りを運ぶ。二人は何を想いながら大岡川の花火を見ているのだろうか。私は今年の夏に逝ってしまった母を想い、赤や緑の光跡を残し消えてゆく夜空をじっと見つめていた。

目が覚めると、時計は12時をとうに過ぎていた。すっかり昇りきった太陽は勢いを増し、部屋の中は蒸し風呂状態だ。汗だくのままぼんやり外に目をやると、どんな夢をみていたのか、気持ちがひどく動揺しているのがついた。まだ小さい頃、親とケンカした時に感じたあの胸の痛みがあった。自分でもわからず泣いてしまいそうになったが、恥ずかしさからぐっところえた。

昨日は飲み過ぎた。ベッドから這い出し、昨日はいていたズボンを脱ぐと、ポケットに見知らぬ紙きれが入っていた。そこには女性らしいきれいな字でこう書いてある。

「黄金町 明日15時 かなこ」

バイト先の仲間から大学の後輩まで、思いつく限り考えたが「かなこ」らしい人物は出てこない。黄金町といえば一度アトイベントで訪れたことがある。どっちみち暇だった。15時なら間に合いそうだ。

「待ってろよ、かなこちゃん。」洗濯したばかりのシャツに着替え、携帯と財布をポケットに突っ込むと、暑さで溶けそうな部屋をあとにした。

午後2時。黄金町は光を浴び、ハレーションをおこしていた。強烈な日射しから逃れるように駅前の古びた喫茶店に駆け込んだ。店主にアイスコーヒーを注文しひと息つくつと、ふと店内に独特のすえた匂いがした。黄金町には特殊な経歴があった。

この辺りはむかし問屋街だった。第二次世界大戦後、京浜急行のガード下にバラック小屋が増え、そのうち売春や麻薬取引のメッカになった。阪神大震災をきっかけに鉄道の大規模な高架補修工事が行われ、高架下で営業していた店舗が周囲に拡散した。平成16年に

神奈川県警による店舗一掃が行われた際、売買春などの違法小規模店舗の数は25件にも達していた。現在は「アートによるまちづくり」が掲げられ、年に一度「黄金町バザール」という大規模なアートイベントが行われている。

喫茶店を出て人気のない町をぶらついていると、一軒の店舗が目についた。遠慮がちに店に入ると、スタッフの女の子がにこやかに微笑みかけてくる。一瞬、「かなこちゃん？」と思ったが、彼女の目に他人行儀な気配を感じた。

「いらっしやいませ。」よく通るいい声だった。店の中は黄金町関連の作家の品物が並んでいる。買わないまま出るのが気まずくなり、一番手頃な置物をつかんでレジに向かった。丁寧に置物を包んでくれる間、思わず口走った。「あまりお客さん来ないんじゃない？」失礼なことを言ってしまったと後悔していると、「そうなんですよ。イベントのある期間とそうでない時の差が激しいんです。」と言って、にまっと笑った。

たまたま買った置物は彼女の作品だった。話していくうちに、彼女はここに来たいきさつを語り始めた。「大学を卒業する年にちょうど東日本大震災があったんです。それまで進路で悩んでいたけど、その時に自分の好きなことをやろうって決めました。」そう言うのと照れくさそうにしながらも目を輝かせた。

店を出て少し歩くと、普通の住宅街だ。急な坂を登っていくと、突然見晴らしのいい公園に出た。空はすでに夕焼け色に染まっている。

「結局かなこちゃんには会えなかったな。」独りごちながら展望台から街を見下ろした。横浜ベイブリッジ、ランドマークタワー、マリントワー、横浜のいわゆる観光名所が一望

できた。一方、手前に目をやると、閑静な住宅街との間に派手な看板をつけたビルが雑然と建ち並んでいる。もはや黄金町がどこなのかもわからない。色んな人々が息づくその眺めは、歴史をそのままかたどった地層のように見えた。

黄金町駅で帰りの電車を待ちながら、お店の子の名前が何だったのか気になっていた。また近いうちに黄金町に来ることになりそうだ。

梅雨が来た

コガネムシ

またいやな季節が始まった。そう梅雨が来ると思い出してしまうのです。なぜか毎年。

私はヒロコ 横浜〇〇区にある某クレジット会社で働くパートタイマー 保険会社に勤める夫と二人暮らしの32歳。私の職場は簡単にいうと支払遅延者に対する督促業務。職場の殆どが女性職員なの。たどえて言うとお大奥みたいな組織で女帝大松を頭にして二番手は私、その次に大島、……というピラミッドが出来上がって、部署内の社員はというと、小後課長と部下の村川さんの二人だけであとは学生アルバイトの男子が二人って感じ。まあ女の世界なので、休憩時間になるともっぱら男か家庭の話でもちきり。姑がいる子は愚痴の嵐で、夫持ちは亭主の悪口、×の付いている子は男の自慢話（まだものにできていないのに）。

私は特に自分の事より周りの相談に乗っているタイプだったのに……。
今週からアルバイトの男子が二人入れ替わったわけ。そうその内の一人が遅しくて清潔感あふれる好青年、マジ好みのタイプで気になり始めちゃったんだ。アプローチかけるにしても、女帝大松が休みの日か、男子と席が隣になるときか、資料室のデータを探してる時しかない。どうしようかなと思っていた矢先に、支店の売上達成パーティーが開催されることになり、アルバイトを含めた全員参加で行われることになったの。

この時しかないと色々ストーリーを組み立ていざ出陣。思った通りアルバイトの男子は場馴れしていないせいか大人の世界に圧倒されてる感じだったので、さりげなくスルスルと彼の横に移動し、この後予定がなかったら飲み直さないと声を掛けてみた。彼の反応はというとビクビクして返事に困った感じ。とりあえず21時に元町の改札出たところで待つ

てるからとなかば強引にしかけてみたの。

時間になると彼は一人でやってきたのだ ラッキー。

お腹は空いてなかったので、ショットバー ダミアンへ入り、カウンターに二人で並んで座ると、若いバーテンが少しびびくりというか、イヤラシイ視線を送ってきた。こうは見えても私だって大学生のころは引手あまたのモテモテの時期があったのに（ちょっと言い過ぎかな？）、世の男はどこ見てんのよ、失礼しちゃうわ全く。 そんなことはさておき、彼はというと、やはり緊張気味だったので、私がリードしてお薦めのカクテルを選んであげた。店内はムーディーな曲が流れていてなかなかの雰囲気の中、次に逢う約束をし、そのまま家に帰ったの。

翌日から職場へ行くのが楽しくて楽しくて、周りも少し勘ぐる感じで色々詮索されつつ、かわしかわしでこっそりとデートを重ね、関係を持つ仲になったの。その後何度かデートを重ねるにつれ部署内の話もするようになり、常々感じていた事が彼の口から出たのです。「ところで小後課長は独身？」当たり前と即答、「というかかなりきついんです 臭いが……」その瞬間、大笑いというか、同感というか、課長以外の皆が嫌がってる事を指摘したのです。課長は彼とは正反対のチョー不潔でお風呂入ってるのって感じの臭いを通り越したイタクて鼻に突き刺さりそうな臭いがブンブン。しかも、この時期エアコンのせいもあり、職場内は逃場のない空間が出来上がるの。課長が側に来た時には息を止めてるから話しかけられても返事ができない状態になりいつも困ってるの。やはり誰でも誰にとってもクサイ物は臭いのね。女帝からも支店長へクレームを出したこともあった

けど、課長の業績はかなり良いらしく、支店長は遠慮してキツクは言えないらしく、みんながっかり。確かに仕事はできるし、お金も持ってるし、もうちょっと小奇麗にすればお嫁さんもすぐに出来そうなのに残念。でも彼も同じ気持ちを持っていてくれて何だか少しほっとしたわ。彼が言うには課長に飲みに連れてってもらった時に、「安くて遊べる店教えたるか、

黄金町へ行けば一円で御釣りくるで」と言われたそうなの。それを聞いた瞬間、もしやあの課長変な病気持ちってるんじゃないかと、何だか首筋にもデキモノがいっぱいあってよく掻いてるし、クサイし……。

でも、今日のお酒は美味しいし、焼き鳥もかわらず美味しい。蒸し餃子も食べたいな。ただこの場所から少し先には今は様変わりした黄金町があったのかと思うとガツカリしちゃうけど、彼との思い出に浸るのにいいスポットがまだ沢山ある黄金町となり野毛が好き。

昔のちよんの間長屋が姿を消した今の黄金町は、カフェやアート系のスタジオ等が数多く出来ていて、以前と比べるとかなり綺麗になったな……多分見た目にはね、だけど隠れて見えない部分はきつといまだに残っているんだろうな。

課長にばったり会わないように野毛より先には足を向けないでおこう。

彼がイギリスに旅立ってしまった25年前の楽しく切ない思いで……。

事実を掘り起こし、それを的確に読者に伝えようとする「報道」とちがって、エッセイのような文芸的作品的執筆依頼を出すとき、編集者は著者の個性を想定し、あるテーマについて読者に新しい視点を提供したり、読者の中にさまざまな心の変化を引き起こす文章を求めている。

調査や取材の中で得られたものは、あくまでも材料のごく一部に過ぎず、さまざまな材料は、著者が自分の視点を形成するためであって、材料自体がそのまま文章に露出する性質のものではなくなる。

本講座で僕が受講者に求めたものは、まず、課題（＝執筆依頼内容）について、第一感として自分自身のイメージをもつこと、その上で調査取材をして、得られた情報から、改めて自分の作品の内容を決定し、執筆すること、その過程で、自分が得ている情報を取捨選択し、それらをあくまでもひとつの材料として、自分の作品にすることだった。

自分の体験を折り込む場合でも、読者の心の動きに関係のない事実は大胆に捨てる必要がある。例えば体験を書くとき、自分の人格を守るために言い訳を書く。それでは読者へのメッセージは弱くなる。「読者の喜び」の為に書かなくてはならない著者は、むしろ自分から道化を演じなければならない。読者を楽しませる文章と自分の自我を認めてもらうという文章はまったく別のものになる。

「小説コース」と銘打ちながら講座ではエッセイを扱っているのは、講座の成り立つ文章量の問題もあるが、題材を手に入れ料理するプロセスと着眼点が重要であり、それについて小説でもエッセイでも共通点が多いからだ。また、小説と同じ手法を使うことで、短い

文章で伝えることのできる世界はものすごく大きくすることができる。

講座の手順について触れよう。

本講座は、二〇一三年の五月から七月にかけて、一回百二十分の全三回シリーズで行われた。

一回目は講師である僕の視点から、黄金町という町が歩んだ特殊な歴史を、太平洋戦争末期の横浜大空襲から、戦後のGHQによる近隣の接収、その後の日本の発展の中で町が「売春の町」としてその名を馳せ、そして、アートの新しい町づくりをするに至った経緯について、講義形式で語った。

第二回は、まず、講師の案内によるガイド付きツアーの形式で町を歩き、売春の痕跡、それより古い町のような残すもの、数年前に新しく建てられた黄金町バザール関連の建築物、などを見て回り、その後、各受講者が自分の興味で町を歩き、見て感じる時間をもった。

その上で、宿題として、講師のインプットにこだわらない各人の視点で、千六百字（四百字詰め原稿用紙四枚）のエッセイを提出することを課した。

三回目では、全員の作品について、読者を意識した文章はどうあるべきかという観点から、講評合評を行った。

これはプロの文筆家が「黄金町についてエッセイを書いてください」という依頼によって、文章を書き、それを媒体の編集者に提出するプロセスを、ワークショップの形式にシ

ミュレートしたものだ。

講座の二回目を終えて、実は受講者の作品を待つのが楽しみながら不安でもあった。

僕が語った内容は「ひとつの情報に過ぎない」ことを強調したつもりだったが、黄金町について僕が受講者へ与えた情報は、かなり濃密なものだったから、もしかしたら多くの人の作品が、僕のインプットに過剰に引き摺られることを危惧した。

幸いそれは杞憂だった。

どの作品も独自の視点、独自の材料とその提示方法、独自の物語性を備えていた。作品を書くために、それぞれがきちんと自分に向き合い、読者を意識した結果だと思う。

初めの原稿が出揃った三回目では、細かな文章の修正などは敢えて取り上げず、視点の運びや、読者に提示する方法について、できるだけ分析的に講評することを心がけた。

講座修了後、各自の改稿を経て再提出されたものがこの作品集に収録されている。

「小説コース」の狙いの通り、いわゆる「随想」のようにさらりと思うままを吐き出した作品ではなく、たった原稿用紙四枚という少ない分量でありながら、濃密で（エッセイなのに！）物語性の高い作品に仕上がっている。

少ない文字数の中で果敢な挑戦をした「著者」のみなさんに敬意を表したいと思う。

この作品集は、黄金町芸術学校の小説コース「エッセイで黄金町を語る」の受講生の作品を収録したものです。各作品の著作権は各著者にあります。

黄金町芸術学校 2013 前期 小説コース
エッセイで黄金町を語る 作品集「町を見る目」

発行年月日 二〇一三年八月三十一日（初版）
発行 黄金町芸術学校（黄金町エリアマネジメントセンター）
〒231-0066 横浜市中区日ノ出町2-158

編集 阿川大樹